

週日の説教（復活の水曜日）

金 大烈 神父 2011年4月27日（水）

《復活の体験 ―求める心から―》

ご復活おめでとうございます。

伝統的に復活祭が終わって、司祭はエマオへの旅という休暇を取ります。しかし、時間があってどんな条件が備えられても、今のこの時、何処かへ出かけて行くのは私としてはすまない心なのです。それで復活祭の喜びの時間をどうすればいいかと思ったのですが、やはり教会を守る方法しかないのではと思いました。では、説教から解放されてみようと、（皆が笑った）思ったのですが、皆様の顔を見ますと、やはり一言何か言わなくてはならないという気持ちになりました。

さあ、私が復活祭に復活は体験だと申し上げました。今日の福音（ルカ 24・13～35）の物語がそれを裏付けてくれる内容です。マグダラのマリアは復活されたイエス様に出会ったのですが、イエス様だとは気がつかず園の管理人だと思ったのです。そして二人の弟子も、エマオへ行く途中に現れたイエス様に出会って話をしているのですが、パンを裂いて下さるまではその方がイエス様だと思わなかったのです。なぜ彼らはイエス様だと分からなかったのでしょうか。なぜ気がつかなかったのでしょうか。復活とはここから始まります。

2000年経って、今、私達はイエス様の復活を信じますかと問われて「はい、信じます」と誰もが言います。しかしその中身が本当のものになるためには、やはりここから始めなければなりません。2000年前に、自分達の目の前に現れたイエス様を気づかなかった弟子達です。しかもイエス様がなぜ死んでしまったのか、その理由さへ完璧に忘れたしまった者達です。

今日、復活されたイエス様に出会うには条件があります。それはイエス様が彼らの目を開けて下さったこと。結局復活の体験は、この胸からする体験は、まず私達の求める心が必要です。エマオへ行くこの二人の弟子も、この世を救って下さる大事な立派な方だと思っていたのにと、イエス様をもどかしい心で強く望んだわけです。それで目を開けてもらったのです。マグダラのマリアは私の主よ、主よ、どこにいらっしゃるのですかと、涙を流しながらその怖さも忘れて捜し求めて歩いたのです。その求める心があったからこそ、イエス様はご自分の復活を体験させて下さったわけです。もし私達が2000年前イエス様と共に時間を過ごして、その方が亡くなって三日目に何かをなさると聞いていたけれども、といった曖昧な考えを持っているだけでは、イエス様が現れても私達は気がつきません。これが信仰です。これが復活の体験です。

皆様が生きている神様の子、イエス様の復活を体験するためにはやはりここから始まらなければなりません。大事なことです。ですから私が復活祭に、ここからが大切ですよと言ったわけです。人々の話はいいですね。一番必要なことは自分が体験することです。

さあ、今日エマオへの二人の弟子の言ったこととして『また、聖書を説明して下さったとき、わた

したちの心は燃えていたではないか』と、日本語にはこのように訳されているのですが、これは表現としてちょっと弱すぎると思うのです。『心が燃えていたではないか』。原文ではこのような生ぬるい表現ではありませんでした。ここは「私の心はどの位燃えていたか覚えているのか」という話です。本当に心は熱く燃えていた。「このように熱く私の心は燃えていた」という告白です。そして、パンを裂いて下さった時に「ああ、あなたでしたか」という悟りと共に、去られたイエス様の姿。

皆様、私達はこれからも復活の生き方をしなければなりません。“復活の生き方は、求める心からです”。頭ではなく胸で求める心です。胸で求める心がある限り必ず体験します。

さあ、ミサの時も私達は意向を持って祈っています。その意向が叶えられるための一番の基準は何でしょうか。まず私が求めていることが、願っていることが、正しいかどうか考えて下さい。そして私が祈るその対象が相応しくて、その対象者に必要な祈りであるか、それを考えて下さい。その後結果がどうなっても私に一番相応しい、そしてその意向に一番相応しい結論として、神様が成し遂げて下さったと信じなければなりません。それが祈りです。私達の浅い心は、どうにか聞き入れてもらったと思えば、涙ながらに神様感謝しますと言うのですが、聞いてもらえないと思えば、すぐがっかりしてしまいます。

皆様、そのような心では復活の体験はできません。復活の体験はある日突然に始まって、突然に終わるものではありません。死ぬ時まで完成させながら行く体験です。皆様は長年の信仰生活の中で色々な体験をして来たことと思います。それを一つにまとめると、今日述べてきた姿が見られると思います。

ありがとうございました。